

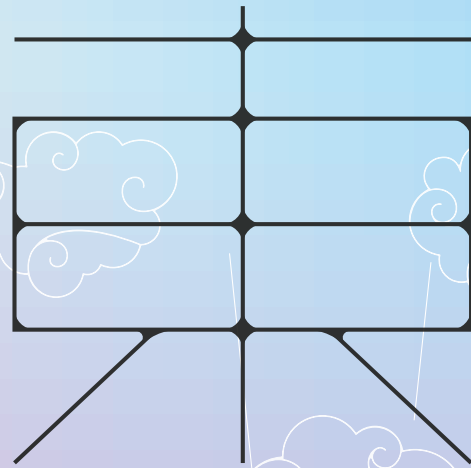
SPECIAL ISSUE

特集①

《対談》同情は続かない

福祉の主役にならない、プロたちの関わり方

かしこさは、
A-
に。



A-の手触り、
ICTの温もり。

デジタル特集

A-が事務を担い、人は現場へ。

DAWN OF TECHNOLOGY, WARMTH OF HUMANITY

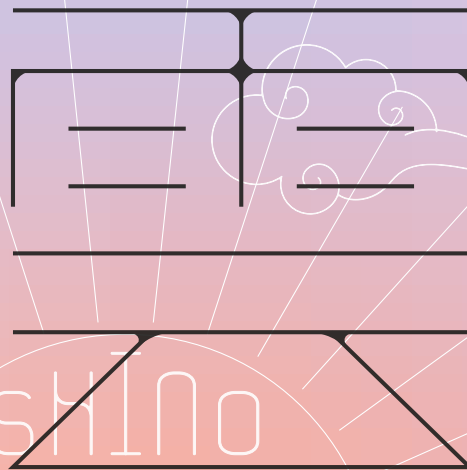
SPECIAL ISSUE

特集②

学びのモデル／学びのかたち

『あいのきせき』ずっとそこにいた「私」をみつける――
―特別支援学校卒業後の「学びの断絶」に挑む。

しのめ【東雲】
東の空がわずかに明るくなる頃。
夜明け方。あけぼの。



やさしさは、
ひとに。

特集③

ほのびあ

「悩んでいるのは自分だけじゃない」
に出会える場所





ごあいさつ

理事長／CEO

乾 祐子

CONTENTS

- 01 … 代表挨拶
- 02 … 団体概要、2024～2025のハイライト
- 03 … 特集①《対談》同情は続かない 福祉の主役にならない「プロたちの関わり方
- 07 … 特集② 学びのモデル／学びのかたち「あいのきせき」
ずっとそこにいた、「私」をみつめる―特別支援学校卒業後の「学びの断絶」に挑む。
- 09 … Report『あいのきせき』延べ5,000名が見た学びの新領域
- 11 … 特集③ ほのびあ「悩んでいるのは自分だけじゃない」に出会える場所
- 13 … あいの実活動報告
- 15 … デジタル特集 AIが事務を担い、人は現場へ。
- 17 … 決算ダイジェスト／数字で見るあいの実
- 18 … ACTIVITY PLAN 2026-2027 活動計画／ご支援くださったみなさま

「まなざしと想いが重なる交差点」

この一年を振り返りますと、AIの進歩の速さに、ただただ驚かされるばかりでした。日ごとに賢くなるAIが、私たちの仕事のなかへどんどん入り込み、書類づくりや記録の多くを、いつのまにか引き受けてくれるようになりました。あいの実の事務所でも、その力を借りながら、日々を過ごしております。

便利になつてありがたいと思う一方で、私は近ごろ、あらためて感じております。どれほど機械が賢くなつても、決して代わることのできない存在があると。それは、利用者さんや家族のそばに立ち、その手で支えるスタッフです。

この一年も、現場のスタッフは、機械にはできない仕事を静かに積み重ねてくれました。ヘルパーが朝な夕なにお宅へ通い、痰の吸引や入浴を支え、その方の暮らしとご家族の安心を守ること。学びの場で、子どもさんの視線がわずかに動く、その一瞬を受けとめること。「ほのびあ」で、「二人じゃない」と言い合えるまで根気よく寄り添うこと。カフェ・ドゥ・チルミルで、医療的ケアの必要なお子さんを育てるお母さんたちが、スタッフとして店に立つこと。一人ひとりの名前を呼び、その日の小さな変化に気づく。そうした、人にできないことを担

うスタッフこそ、あいの実のかけがえない財産だと、しみじみ感じております。

「人からしてほしいと思うことを、人にする」。この思いは、時代がどう変わっても揺らぐことはありません。AIに任せられることが増えた分、私たちは、人と向き合う時間を取り戻せるようになりました。その時間を、目の前のどなたかのために使えるスタッフがいます。それが、これからのあいの実のいちばんの強みだと思っております。

いつも支えてくださる皆さま、そして現場を担うスタッフ一人ひとりに、心より御礼を申し上げます。

ABOUT SWC AINOMI

社会福祉法人あいの実（SWCあいの実）

PROFILE

あいの実
について

介護事業者からソーシャルビジネスプレイヤーへ
全く新しい社会福祉法人の姿を、東北・仙台から発信

2005年4月、小さなNPO法人として仙台に生まれたあいの実は、令和7年度、設立から20年の節目を迎えました。訪問介護から始まった歩みは、子どもたちの療育へ、医療へ、アートへ、学びへと広がっています。20周年の一年もまた、新しい種をまく一年になりました。

SWC

SWCあいの実とは東北・仙台市の社会福祉法人です。特定非営利活動法人の略称がNPO(Non-Profit Organization)であるように、社会福祉法人にも略称があってもいいんじゃない？それで私たちは社会福祉法人の略称としてSWC(Social Welfare Corporation)を先駆けて使うことにしました。全く新しい社会福祉法人の姿を東北・仙台から発信していきます。

HISTORY

あいの実
のあゆみ

● NPO法人時代

- 2005 特定非営利活動法人あいの実 設立(4月19日)。訪問系サービスから歩みを始める
- 2012 本部事務所を仙台市泉区北中山に移転(5月)／ケアプランセンターあいの実 開設(11月)
- 2014 あいの実ラズベリー 開設(9月)
- 2015 児童発達支援を開始(4月)／本部事務所を泉区実沢中山北に移転し、あいの実クラベリー 開設(12月)
- 2017 生活介護を開始(4月)
- 2018 Honey Nap Cafe 開設(3月)

● 社会福祉法人へ

- 2021 社会福祉法人あいの実 設立(6月14日)
- 2022 相談支援 あいの実オリーブ 開設(6月)
- 2023 COCOON西田中EAST 開設。あいの実ブルーベリー・ストロベリー・あいの実クリニックが誕生(1～4月)／仙台あばいんプロジェクト 始動(春)／COCOON西田中EASTが2023年度グッドデザイン賞を受賞(10月)
- 2024 CAFE de CHILL MILL オープン(4月)／介護員養成研修事業者の指定(12月)／『GAZE ART BOOK』発行(12月)

2025年度 (2025.4～2026.3) — 設立20周年の一年

- 4月 ほのびあ 始動(仙台市市民協働事業・医療的ケア児者と家族のピアサポート)
- 6月 COCOON西田中EASTが建築界でダブル受賞
(日本建築学会「作品選集2025」掲載・第45回東北建築賞 特別賞)

- クランベリー・ブルーベリーを多機能型事業所として一体運営へ再編
- 生涯学習プロジェクト 始動
(厚生労働省補助事業・ICTを活用した学びのカリキュラム)
- 西田中に事業用地を取得。次の拠点づくりへ

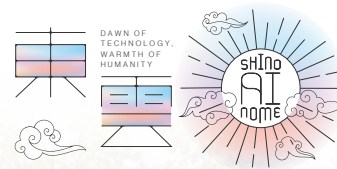
20年で終わらない物語を。――

あいの実は、次の10年に向けて歩みつづけます。



同情は、 続かない。

SPECIAL ISSUE
特集①



福祉の主役にならない、プロたちの関わり方
視線入力描画アプリ『アイペイント(仮称)』開発をめぐる二者対談



対談の背景 — iPadでも視線入力を

視線入力技術により、重度の障害があっても創作活動ができる時代がきました。

現場では、その日の体調に合わせて短い時間で始められる環境も求められていました。そこで目を向けたのがiPadです。

あいの実はこのデバイスの可能性に着眼し、ソフトウェア開発会社・株式会社GEARとの協働で、iPad向けの視線入力アプリ開発に乗り出しました。GEARがまず自主的にプロトタイプを構築し、現在はいいの実が受託した厚生労働省の事業の一環として、製品化に向けた開発が進んでいます。

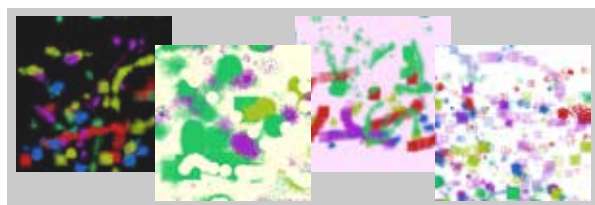
MICHIKATA TODA 株式会社GEAR テクノロジーの人
戸田 学孝
久保 潤一郎 社会福祉法人あいの実
×
あいの実
MORITAKE ABE バンビグラフィックス ビジュアルの人
アベモリタケ

声や手で思いを伝えることがむずかしい人が視線だけで絵を描く——その入力装置の可能性に、ソフトウェア開発のエンジニアとグラフィックデザイナーが、それぞれ別の入口から惹かれ、あいの実の現場で出会いました。2026年7月3日、あいの実CO-OPON西田中EAST(仙台市泉区・西田中)の自宅で、「ソフトウェア会社が取り組む社会貢献——視線入力アート支援から始まった福祉との協働」をテーマに対談を行いました。進行は、あいの実専務理事の久保潤一郎。本稿はその内容をもとに構成したものです。

こうして生まれたのが、iPadアプリ「Eye Point(アイペイント・仮称)」です。現在はテストフライト(アップストア公開前の試験配信)の段階。あいの実の生活介護事業所「ブルーベリー」では、利用者が実際に作品を制作しています。



Eye Pointでの制作風景



Eye Pointで実際に制作された作品



開発中のiPad 専用視線入力アプリ「Eye Point」



彼らは福祉の人ではない

また、デザイナーのアベモリタケ氏(バンビグラフィックス)は、視線入力で描かれた作品を『GAZE ART BOOK』(2024年12月発行)として編集・デザイン監修し、障害のある人のアートを一般のプロダクトとして社会に送り出してきました。



障害者の背景は知っていても知らないふりをした。重要なのは、このアートが社会で通用するかどうか。——アベ氏

バンビグラフィックスのアベモリタケ氏はグラフィックデザイナー。GEAR戸田学孝氏はソフトウェア開発会社の代表。どちらも、介護や福祉の領域で働いてきた人ではありません。久保アベさんは、視線入力アートに最初に触れた時、何を感じましたか？

アベ 単純に入力装置自体のポテンシャルがすごいなと思って、面白いものができるんじゃないかという感じでした。社会的意義みたいなものは、実はそこまで深く考えてなくて。それよりも、一般社会でどう通用するかってことの方が重要じゃないかと思っていました。



「私たちのやっていることは役に立っているんだ」付加価値のはすが、現場を見て気持ちが変わりました。——戸田氏

久保 戸田さんは、もともと福祉とは別の畑ですよ。最初に福祉と接点を持ったきっかけは、戸田 2000年にGEARを立ち上げて、ソフトウェア開発をやってきました。その後、介護施設のレクリエーション向けに、マイクロソフトのモーションセンサー「Kinect」体の動きを検知するカメラを使ったゲームを開発したんです。仙台市の助成事業に提案して採択されたんですが、正直に言うと、会社のネームバリューを上げるための付加価値としてやったんですよ。ただ、そのゲームが出来上がった施設を回らせていただく中で、利用者の皆さんが本気で取り組んでくださる姿を見て、気持ちは変わっていきました。

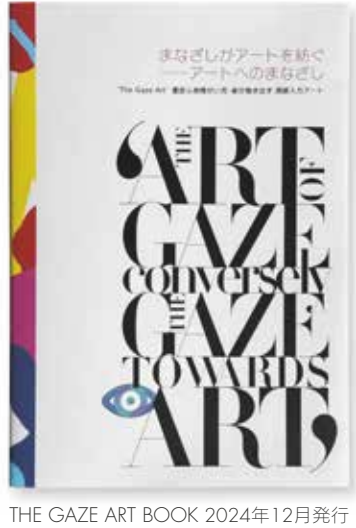
その後は医療分野に移り、山形大学の重粒子線治療装置(がん治療に用いる放射線装置)のシステムマネジメントなども手がけました。そうした経験を経て、あいの実さんから「Eye Point」での視線入力アプリ開発の話をお願いした時、純粋にワクワクしましたね。新しいものにチャレンジさせていただけるということ。

③ それぞれのスタンス

——主役にならない関わり方

久保 アートブックを制作する時、どんなことを意識しましたか？

アベ 深く対象者に寄り添うということは、実は意図的に避けた。入っちゃって情が湧いてしまつて、バックストーリー重視になつてしまふ。「頑張つて作つたんだね」じゃなくて、純粹に見てもらえるものにするのが重要だと思つて作りました。



THE GAZE ART BOOK 2024年12月発行

※これらの作品は、視線入力訓練アプリEyeMoT（岩手県立大学 伊藤史人研究室）を使用して制作しました。https://www.poran.net

久保 それはなぜですか？

アベ 同情的なもので入つていつても、すぐに終



わつちやう。続かないんですよ。障害があるかどうかを知らなくても「いいものだ」と手に取ってもらえること。その方が相手にも愛着が湧くし、その時だけじゃないものになつていく。こちらは枠組みを作るだけ。障害者の状態はそれぞれ違う。体が動く人もいれば、動かない人もいる。現場では一人一人の状態に合わせて支援の仕方を変えている。デザイナーとしても同じです。その多様性を理解した上で、枠組みをしっかりと作つてあげる。そうして初めて、社会に通用するプロダクトになる。そこに携わつていけるのが嬉しいですね。

アベ 同情は続かないんですよ……

久保 GEARとして、このプロジェクトの面白さはどこにありますか？

戸田 大体は私たちがソフトを作つて「使えるよ」で終わりなんですよね。でもこのプロジェクトは、自分たちが作つたものの先にストーリーがある。本になつたり、プロダクトになつたり、それを手にした人が喜ぶ。その仲間に入れていただけてるのがすごく楽しいんです。ワクワクですね。次に何が起きるんだろうって。久保 同時に、「ビジネスとしての判断もあるのですか？

戸田 ありますね。今までの価値観で開発をやつていたら、多分淘汰されます。Aーによつて単純なプログラマーはどんどん切られていく時代です。使えるだけじゃなくて、何に使うかを知らないダメだと。これを掘り下げることは単なる研究じゃなくてビジネスに繋がるので、結果として自分たちの生き残りの手段にもなっている。そこは正直なところですよ。

その先のストーリーがすごい。その仲間に入れていただけたのがワクワク。戸田

④ 具体的な動き

——製品化、そしてその先へ

久保 今後に向けて、どんな体制で進めていきますか？

戸田 うちの若手エンジニアを一名、このプロジェクトに専属で配置しました。研究開発として位置づけていて、マネタイズとは切り離しています。大学を卒業したばかりですが優秀な子で、Aーを活用しながら何ができるかを日々探つています。細かく要望をいただいて、定期的に「ここ直したんで見てもらえませんか」というやり取りをしながら、製品化に持っていきたいと思つています。

久保 Eye Pointの現状と課題は？

戸田 正直、まだまだだと思つています。これで終わりなら、もやもやします。自分で意識せず



に視線を動かした先に、何の違和感もなく描ける。そこまで行かないと「作つた」とは言えないですね。でも、PCと同じぐらいの使い勝手まで持っていけば、iPadは間違いなくいいデバイスだと思う。だから、そのフオリティを上げていかなきゃいけない。

「直したのでもってえませんか」専属配置した子がすごくいい顔で言ってくるんですよ。戸田

あいの実では現在「Eye Point」の製品化(App Store公開)に向けた共同開発を本格始動させています。また、企業がカレンダー等の配布物に視線入力アート作品を採用する動きも始まっています。

⑤ 企業が福祉に関わるということ

あいの実の久保潤一郎専務理事は、今回の取り組みについてこう語ります。

「大学等の機関には研究開発の資金があります。が、福祉に寄りすぎてしまい、社会実装までたどりつきにくいという側面があります。一方、民間企業は自由な発想と予算の使い方ができるポテンシャルを持ちながらも、初期投資や採算性の問題で、なかなか福祉の領域に手を出しにくいのが実情です。その中で、GEARさんとバン

ビグラフィックスの阿部さんが、このプロジェクトにチャレンジしてくださった。これは本当にありがたいことです」「支援金をいただくこともありがたい。でも、企業の皆さんが得意分野で関わってくださることで、福祉の側にも企業の側にも、これまでにない価値が生まれると感じています」

⑥ 福祉との関わりは、

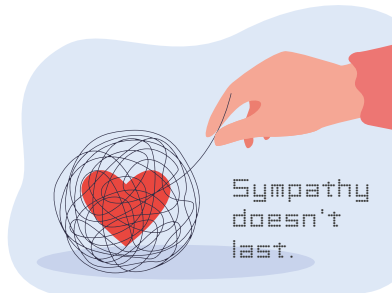
寄付やボランティアだけではない

今回の対談で印象的だったのは、アベ氏も戸田氏も、福祉の主役にはならず、現場にもとまらない点です。デザイナーとして、エンジニアとして、それぞれの誇りと打算を持ったまま、福祉に関わっています。

福祉との関わりは「寄付をする」「ボランティアに参加する」だけではありません。企業の得意分野——技術、デザイン、ネットワーク——を活かして関わる道があります。異なる分野が結びつく時、ブランドイメージの向上や人材の採用・育成の起爆剤にもなり、福祉の側にも企業の側にも、これまでにない新しい価値が生まれます。

プロたちがそれぞれの領域で、熱い想いで歯車を回し始めた時——福祉が動き出し、社会に新しい扉が開かれていく。

「世の中になくしたものを作つていく」。3社の挑戦は、まだ始まったばかりです。



久保 潤一郎(くほ じゅんいちろう) 社会福祉法人あいの実専務理事。重度障害者の生活支援・在宅支援を行うあいの実にて、視線入力アートプロジェクト、iPad向けアプリ「アイポイント(仮称)」開発等、テクノロジーを活用した新たな福祉の取り組みを推進。



アベモリタケ バンビグラフィックス代表/デザイナー・アートディレクター。仙台市在住。1998年独立。グラフィックスを中心に、空間・WEB・プロダクトIDなど多分野のプロジェクトに参加。複合商業ビル(Shop and Wander AER)年間販促計画のCD・AD、ヘッドホン・スピーカー等メーカーのプロダクトデザイン・広告ディレクション、ベトナム寿司チェーン(Tokyo Deli)スタートアップ参加など。あいの実との協働では、視線入力アートブック「GAZE ART BOOK」の監修や、厚生省事業成果報告書「あいのきせき」のデザイン、あばいんプロジェクト、カフェドゥチルミルのビジュアルディレクションを手がける。https://www.bambigraphics.com



●対談参加者プロフィール

戸田 学孝(とだ みちたか)



株式会社GEAR
株式会社gear取締役
2014年以前の会社で仙台市の介護事業のレクリエーション向けにKinectを使ったゲーム開発のプロデュースに関わる

2022年株式会社GEARに入社
現在は会社経営に携わりながらAIを利用したビジネスモデルのプロデュースを行う
今後の目標はAIを利用したコンサル業務に携わりいろんな企業から必要とされる会社づくりを目指していきます
https://www.gear-inc.com/

2 学びのかたち

「介助者」から「生涯学習パートナー」へ

対象は、生活介護を利用する重症心身障害のある方、医療的ケアが必要な方々。言葉で思いを伝えることや、体を自由に動かすことは難しくても、その内面には豊かな感情と「やってみたい」という意欲が秘められています。進め方は3つのステップで設計されました。

STEP 1 今ある機材を活用する

視線入力訓練アプリ「EyeMoT(アイモット)」や様々な外部スイッチを試し、仮説と検証を繰り返しながら、一人ひとりに合った入力方法を探す。

STEP 2 なければ、創る

既存のソフトで応えきれないニーズには、iPadなどの他プラットフォームも視野に入れ、オリジナルアプリの開発で挑戦する。

STEP 3 日常に組み込む

1人あたり10～15分。特別な時間ではなく、日々のプログラムに自然な形で導入し、楽しく続けられる生活の一部にする。

いちばん大切にしたのは「視点の転換」です。評価の軸を「正しくできたか(正答率)」から、「本人の意欲は引き出されたか」「またやりたいと思ってくれたか」へ。うまくいかなかった記録も「失敗」ではなく、「この方法は合わなかった。次はこうしよう」につながる貴重なデータとして扱いました。スタッフの役割は、表情・目の動き・呼吸といった言葉にならないサインを見逃さない「観察者」であり、「できた！」の瞬間に立ち会う「喜びの発見者」です。



あ い の せ き

SPECIAL ISSUE
特集②

——特別支援学校卒業後の「学びの断絶」に挑む——
ずっとそこにいた、「私」をみつける——

1 学びのモデル

厚生労働省

「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」
生活介護あいの実ブルーベリー発、全国へ届ける学びのモデル

特別支援学校を卒業すると、体系的な「学びの機会」は大きく減ってしまいます。日々の活動が、本人の意思とは別のところで「させてあげる」支援になっていないだろうか——。あいの実はこの問いから出発し、令和7年度、厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」に採択されました(交付額9,932,000円)。視線入力やスイッチなどのICTを「思いを表現するための翼」として、生活介護の現場に生涯学習を組み込む。その一年の挑戦が、展示会『あいのきせき』と一冊の報告書に結実しました。

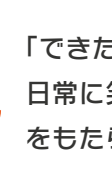
利用者が日々の活動の「主役」になる

1 発見



ICT機器で「やりたい!」を見つけ、選択肢を広げる

2 実現



「できた!」を重ね、
日常に笑顔と自己肯定感
をもたらす

3 貢献



事例集として
社会に発信し、
全国のモデルへ

現場の推進

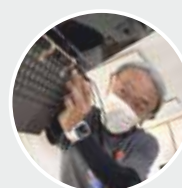
現場の推進の中心を担ったのは、本事業コーディネーターの岩元優子(短期入所『あいの実ストーリー』管理者)。日々の活動設計から記録・検証までを束ね、専門家と現場をつなぎました。

専門家チーム



伊藤 史人 先生
岩手県立大学
ソフトウェア情報学部 講師

無料の視線入力訓練アプリ「EyeMoT(アイモット)」の開発者。2025年12月のワークショップでご助言をいただきました



福島 勇 先生
熊本高等専門学校
特命教授

特別支援学校で32年間教壇に立ったICT・支援技術活用のパイオニア

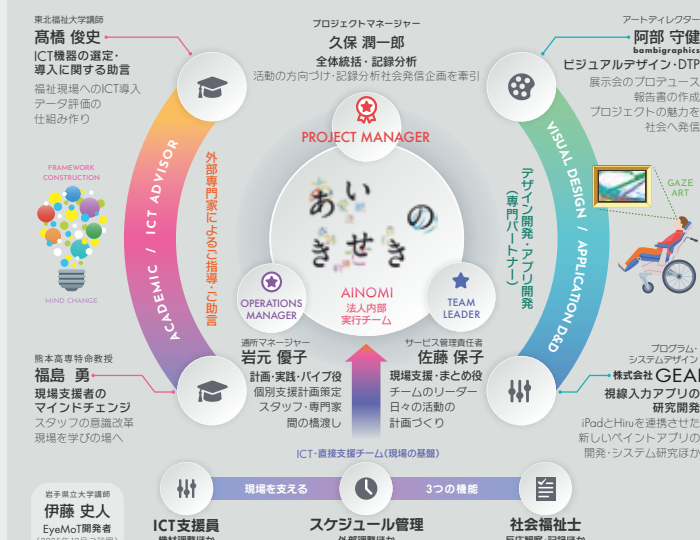


高橋 俊史 先生
東北福祉大学
共生まちづくり学部 講師

重度障害者用意思伝達装置など支援技術の導入・普及の研究者



プロジェクト関連図





Report

延べ 500名が見た「学びの新領域」

人間としての底力の強さにも感動

「この人の心の絵ですね。心が掴まれたようだ」

一年の実践の集大成として、2026年2月24日・25日、せんだいメディアテーク1階オープンスクエアで視線入力アート成果展『あいのきせき』。ずっとそこにいた「私」をみつける学びの新領域を開催しました。来場者は2日間で延べ500名。会場には、視線入力で描かれた作品はもちろん、そこへ至る制作過程や学びの記録、学習ムービー、そして来場者自身がスイッチや視線入力を試せる体験コーナーを配置。「作品」だけでなく「表現が立ち上がるまでの道筋」ごとく見てもらう構成にしました。地元のテレビ局の取材も入り、地域への周知にもつながりました。

線を引くのは、やってみると簡単ではないのです。だからこそ、体験を終えた人たちはもう一度作品の前に戻り、「これを視線だけで描いたのか」と見入っていました。作品のすごさが、体験を通して伝わった2日間でした。

この一年の実践と検証は、成果報告書『あいのきせき』として一冊にまとめられています。デザインは本誌と同じくアベモリタケ氏（パンビグラフィックス）。成功事例だけでなく「つまづかなかったこと」も含めて記録した「生きたノウハウ集」です。



成果報告書『あいのきせき』

芽生えた意思の物語——

「やる側」から「する側」へ

報告書には、7名の利用者一人ひとりの変化が「個別事例集」として収められています。ここでは、重点学習者として一年間の歩みを記録した5名の物語を紹介します（いずれも支援記録に基づく実話です）。

好きなことをきつかけに

CASE 001

鈴木 楓佳さん

開始当初は、活動への反応が少なかった楓佳さん。ところが、ネイルやおしゃれの話題で笑顔が見え始め、レースゲーム「マリオカート」では自らスイッチを握り続け、体が傾くほど熱中して完走。マウンドナルドでの注文では、複数の写真を見比べて「迷う」という思考の末にポテトを選びました。

恐怖心から「駆け引き」へ

CASE 002

新岡 綾乃さん

新しい機器や大きな音に強い警戒心を示していた綾乃さん。好きな音楽（a i k o）で安心できる環境を整えると、水鉄砲の操作で「スタッフが驚く・濡れる」反応を見て喜び、わざと操作を遅らせてリアクションを楽しむ「駆け引き」まで見せるようになりました。ミシンでのポーチ制作では、完成が近づくとスイッチを連打して意欲を表しました。

「舌スイッチ」という突破口

CASE 003

三浦 統馬さん

手指でのスイッチ操作は緊張でうまくいかず、失敗が続くと目を閉じて「いじける」様子もあった統馬さん。手ではなく舌を使うスイッチに切り替えたところ操作性が劇的に向上し、笑顔で動画をコントロール。熱中のあまり、わざと舌を出し入れしてスタッフの反応を楽しむ余裕まで生まれました。

眠気を飛ばした「視線と振動の合わせ技」

CASE 004

今野 海斗さん



覚醒レベルが低く、活動中に眠ってしまうことが多かった海斗さん。「自分の操作に『できた！』という手応えがないから眠くなるのでは」と考えたスタッフは、視線で画面の風船を割ると首元のクッションがブルツと震える仕組みをつくると、カッと目を見開き、最高の笑顔を見せました。英語版『3匹のこぶた』を何度も自分で選ぶなど、「英語」という意外な大好物も見つかり、スタッフが「目つきが全然違う、寝ている目じゃない！」と驚くほどの変化が生まれています。

「見てつる」を確かめる瞬間

CASE 005

伊勢 冬都さん

視力の状態がはつきり分からなかった冬都さん。検証を重ねると、横の動きより「奥から手前に迫ってくる」映像によく反応することがわかりました。やがて2つの動画から見たい方へ視線を動かす「選択」が生まれ、動きのあるアニメを一貫して選ぶように。視線入力で描いた作品は、お母様が「玄関の白い壁に飾ります！」と話すほどの一枚になりました。

……

ここで得られた知見は、あいの実の生活介護プログラムとの土台となり、全国の重症心身障害者支援のモデルケースとなる可能性を秘めています。ずっとそこにいた「私」をみつける学びは、これからも続きます。

VOICE 「家族の声」

（成果報告書第7章「家族からの声」より原文のまゝ）

● 三浦統馬さんのお母様（三浦美恵子さん）
「思っていた以上にスイッチを使いこなしていてビックリしました」
「統馬にも自分で作った物が気に入って買って貰える喜びを体験して貰いたいと思っています。いつか実現できたら嬉しいです」

● 伊勢冬都さんのお母様（伊勢久美子さん）
「視線入力が出来るということを知った時、ふゆとの本当の思いや気持ちを知ることが出来るのでは？、会話も可能なのではと可能性を感じました」
「冬都が視線入力で描いた作品は、玄関の白い壁に飾ります！（中略）重い障害を持つ方々が、一人の作家、アーティストとして十分認知してもらえような作品ができるといいなと思います。夢ですね」

一年を通じて起きたのは、評価軸の転換でした。「操作ができるか」ではなく「本人が何を楽しみ、何に心を動かすか」。その視点に立ったとき、参加者は受動的な「される側」から、スイッチや視線で環境を変え、他者と関わる「する側」へと変わりつつあります。



※この見開き上のアート作品は、視線入力訓練アプリ EyeMoT（岩手県立大学 伊藤史人研究室）を使用して制作しました。
<https://www.poran.net>





第1回 「日常の困りごと」(2025年7月)

第2回 「就学準備・卒業後の生活」(2025年10月)

第3回 「障害受容」(2026年1月)

すぐに共感し合えたので、皆さんと今日初めて会った感じがしません!

教えてもらって、(旅行やキャンプに)行けるかもしれないと思いました!

先輩たちの強さとパワーに感動しました!



顔を合わせる場「ほのびあ・リアル」も3回開催しました。



わかり合える家族と出会える場所。

医療的ケアが必要なお子さん、重い障害のあるお子さんを育てる家族は、日々の暮らしの中で「誰に相談したらいいのかわからない」悩みをたくさん抱えています。「ほのびあ」は、そんな家族同士がつながるための仙台市との市民協働事業。2025年4月に始動し、最初の一年で多くの家族と出会いました。この事業の大きな特徴は、相談を受ける「家族相談員」自身が、医療的ケアや重い障害のある子を育ててきた当事者家族であることです。同じ道を歩んできたからこそ、わかり合える。それが「ピアサポート」の力です。

「悩んでいるのは自分だけ

特集
③ SPECIAL ISSUE

じゃない」に出会える場所



仙台市市民協働事業提案制度 令和8年度採択事業

医療的ケア児・者
重症心身障害児・者の家族と創る

家族未来会議
KAZOKU MIRAI KAIGI

～父として、母として、きょうだいとして、それぞれの声から、みえる未来～

HONO PEER SYMPOSIUM

とき **2026年10月10日(土)**
13:00～15:30 (開場 11:00～ 開演 12:00～)

ところ **ぐりりホール** (仙台市太白区 あすと長町1-3-15)

参加対象 当事者ご家族/当事者の方/支援者の皆さま どなたでもご参加いただけます。

参加費 無料! 定員 100名

申し込みフォームはQRコードから



LINE ほのびあ 公式LINE
まずは、ともだちに追加してね!

2年目へー家族の声を、地域全体へ。

2年目を迎えた令和8年度、ほのびあは仙台市との協働事業として継続採択されました。未就学期の家族との早い段階でのつながりづくり、支援者との連携強化、相談の入口の拡充——1年目に見えてきた課題に、一つずつ取り組んでいきます。

そして今年度は、家族の声をより多くの方に届け、地域全体で理解を深めるための大きな一歩として、シンポジウムを開催します。



日々の活動をしている?

オンラインでは、インスタグラムのライブ配信で「みんなの工夫自慢」「将来、施設入所は?」「復職できた?仕事との両立」「きょうだいのこと」「NICU・病棟からの初めての退院」といった、当事者家族ならではのテーマを毎週2回発信。配信開始から4か月あまりの中間報告(2025年8月)時点で、総閲覧数は9千833回、動画再生時間は約80時間にのぼり、時間や場所に縛られないオンラインの場が、孤立しがちな家族の「最初の一歩」を後押ししました。画面越しに参加した家族からは「他の人のコメントを見るだけでも、悩んでいるのは自分だけじゃないんだ」と勇気づけられますという声も寄せられています。

個別相談の場は、ご自宅やカフェ、ご自宅病院内、学校、オンライン(ライン・DM)など相談しやすい方法を選べる形に。相談の中身は、医療・ケアのこと、生活や制度のこと、就学のこと、家族関係のこと——集団の中では話にくい複雑な悩みに、家族相談員が自身の経験を交えて寄り添いました。相談のきっかけとして最も多かったのは「知り合いからの紹介」。□□□で信頼が広がっていることが分かります。

手を動かし、学びをかたちに ―― 通所・ストロベリー的一年



マシンでのテキスタイル制作

※これらの作品は、視線入力訓練アプリEyeMoT（岩手県立大学 伊藤史人研究室）を使用して制作しました。https://www.poran.net

通所の現場では、学びの機会も広がりました。定例会には宮城県立こども病院の萩野谷和裕先生（5月）、竹島久志先生・小野寺淳子先生（10月）、下川和洋先生（2026年2月）を招き、専門家から直接学ぶ機会に。6月には「介護・障がい福祉業界 合同説明会」に出展し、通所で働く日々を地域に紹介しました。

ストロベリーでは5月、「視線入力をテキスタイルデザインにする備品購入事業」への助成（45万円）を受けてミシン等を導入し、利用者の作品づくりを事業として始めました。視線で描いたデザインが布製品になっていく―「作る」から「届ける」への一歩です。

病床10床、承認。― 7年ごしの構想が実った年



クリニック診察室

医療的ケアが必要な方のご家族から長く求められてきた「泊まりであすけられる場所」。その構想が生まれたのは、いまから6〜7年前―COCOON西田中EASTの建設計画とともにでした。「いつか、この場所に病床を」。2023年のクリニック開設を経て温めてきた構想が、令和7年度、ついに動き出します。

2025年4月、理事長とともに仙台市医師会を訪問するところから、行政手続きの一年が始まりました。5月に医師会から「10床設置に異議なし」の意見書、7月に宮城県への事前協議申出、9月に県医療政策課のヒヤリング、11月には地域医療構想調整会議での説明と続き、そして2026年1月、宮城県から一般病床10床の承認を受けます。県内で医療型短期入所を担ってきたのは、これまで病院や医療型障害児入所施設がほとんど。診療所が医療型短期入所のために新たな病床の配分を受けた例は、

カフェのママスタッフたち、電波に乗る

医療的ケア児の母親たちが働くカフェ・ドゥ・チルミルは、開店3年目もメディアの注目が続きました。4月にKHB東日本放送「チャージ」で母スタッフの特集が放送され、11月にはNHKラジオ「Nondary」が特集（全国配信）、12月にはTBCテレビ「ひるまでウォッチン！」に出演し、震災の記憶と災害時の支援を語りました。「働く医ケア児ママ」の声が、仙台から全国へ届いた一年でした。



「生きる」に
活動

2025 → 2026
あいの実 活動報告
令和7年度それぞれの現場で 積み重ねた一年を報告します

「生きがい」を
活動



中庭（パティオ）を臨む窓からの陽光が心地いい個室病床



開閉可能な可動式壁を採用した明るく開放感のある病床セクション

県内では他に見当たりません。3月には診療所病床設置許可書が届き、保健所の現地調査も終了。あいの実クリニックは「有床診療所」となりました。構想から約7年。この病床を使った宿泊ありの医療型令和8年4月から開始しています。

一日約46件、ご自宅へ。― 訪問介護の日々



訪問介護の様子



あいの実の屋台骨である訪問介護は、この一年も約1万6千877件、利用者の皆さんのご自宅に伺いました。1日あたり約46件。たんの吸引や経管栄養といった医療的ケアを担える喀痰吸引等研修（第1号）の修了者18名を含む33名のヘルパーが、暮らしのそばで支え続けています。

新しい仲間も育っています。12月には、あいの実オレシアカデミーの第2回介護職員初任者研修を実施し、ミヤンマー・バングラデシ・中国出身の4名を含む受講生5名が修了しました。修了生はあいの実の訪問介護などで勤務し、それぞれの言葉と人柄で利用者の毎日に寄り添っています。

そして
令和8年度へ

令和7年度にまいた種は、次の一年で芽吹きます。

- 承認された病床10床を使った、宿泊ありの医療型ショートステイが開始します
- 訪問看護ステーションの2026年内開設に向けて、準備が進んでいます
- 生涯学習の実践は2年目へ。成果報告書『あいのきせき』が全国の事業所に届き始めています
- ほのびあは2年目の10月、家族の声を地域に届けるシンポジウムを開催します（→特集3）

令和8年度の計画の全体はP19「活動計画」をご覧ください。

地域とともに Moving Forward with the Community

- THE SEED CAMP 2025開催（5月17日）― 当事者・親・きょうだいの3セクション体験型の療育キャンプ。医療型障害児入所施設「カリヨンの杜」の理事らも見学に訪れました。
- 『GAZE ART BOOK』が全国8紙に ― 共同通信の配信で岩手日報・京都新聞・琉球新報など全国8紙に取材記事が掲載
- 視線入力アートがカレンダーに ― 株式会社リコーとの協働で2026年カレンダーを製品化。利用者24名の作品を使用し、売上の一部は視線入力活動費に還元されます。
- 訪問ハーブ、3施設達成 ― ハーブ奏者・曾我あかね氏によるベッドサイドでの訪問演奏が、あいの実三施設すべてで実現しました。
- ご寄贈ありがとうございました。― 大塚商会様より事業所向け物品（5月）、個人の方よりポータブル冷凍冷蔵庫（3月・災害時活用可）をご寄贈いただきました。



現場のICT 視線が、声になる

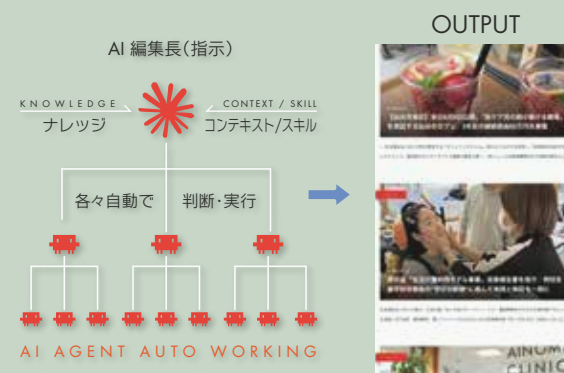
iPadと視線入力で絵を描く。スイッチひとつでゲームを楽しみ、動画を選ぶ。テクノロジーは、言葉や身体の制約を越えて「本人の意思」を表に出す翼になります。この一年の実践は、特集1(視線入力アプリ『アイペイント』の共同開発)と特集2(生活介護に学びを実装した『あいのきせき』)でたっぷり紹介しています。

支える人を守る制度もあたらしく

デジタル化は、働く環境の整備とセットです。2025年11月の理事会で、あいの実はリモートワーク・セキュリティガイドラインとカスタマーハラスメント防止規程、個人情報保護規程を相次いで制定しました。「支える人を守る時代へ」。安心して働ける土台があつてこそ、テクノロジーは現場の力になります。

この広報誌も、AIと

実はこの第25号、編集部にはAIがいます。2026年3月、あいの実は法人内に「AI編集部」を立ち上げました。過去号のアーカイブ整理、年表づくり、数字の集計——編集長の指示のもと、AIエージェントたちが下ごしらえを担い、取材・判断・言葉選びは人が行う。この誌面そのものが、「AIの手触り、ICTの温もり」の実験でもあります。



NEXT デジタル化はこれからが本番です。次の一年、あいの実はさらに進めます。

次に進めるデジタル化

- ヘルパー活動記録のデジタル化 —— 訪問先での記録を紙からデジタルへ
- 会計の自動化 —— 請求書・領収書の処理から月次のとりまとめまで
- 承認システムの自前実装 —— 稟議・承認の流れを法人に合った形で内製
- 目標管理システムのデジタル化 —— 一人ひとりの目標と成長の見える化

AI時代こそ、「ハイタッチ」の時代

AIが事務を担う時代に、価値が上がっていく仕事があります。人が人に直接ふれ、表情を読み、手を握り、そばに寄り添う仕事——いわゆる「ハイタッチ※」な職種です。介護・療育は、その代表です。だからあいの実は、テクノロジーを磨けば磨くほど、人にしかできない関わりへ力を注ぎます。夜明け前の空が少しずつ明るくなるように、AIと人の協働は始まったばかり。あいの実はこれからも、ハイタッチな分野に注力していきます。

※ハイタッチ…「ハイテク(高度な技術)」と対になる言葉で、人と人との直接のふれあいや、心のかような関わりを大切にする仕事・サービスのこと。テクノロジーが進むほど、人のぬくもりの価値が高まると言われています。

AIの手触り、
ICTの温もり。

Aーが事務を担い、人は現場へ。

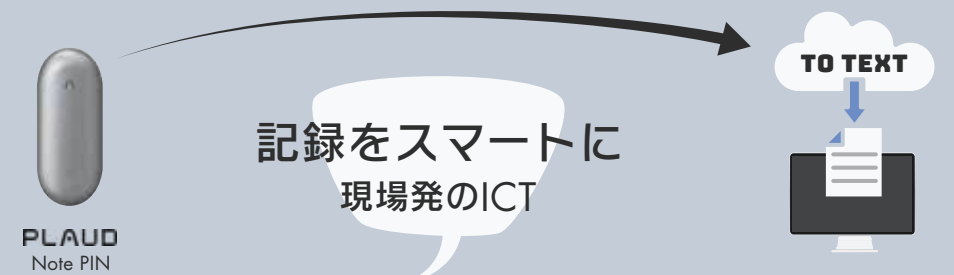


人手不足の時代。あいの実が出した答えはシンプルです。「AーやICTにできることはAーやICTに任せ、人にしかできない仕事——人と人が接する時間——に、スタッフの力を注ぐ」。令和7年度、その挑戦が法人のあちこちで形になり始めました。技術は手段、主役はいつも人です。



会議の準備、議事録づくり、書類のやりとり、経費の集計——福祉の現場を支える裏側には、膨大な事務作業があります。あいの実ではこうした定型業務にAIとデジタルツールを導入し、自動化を進めています。会議の音声はAIが文字起こしして議事録の下書きに。理事会の開催同意のとりまとめはメールとLINEで完結。スタッフの交通費は訪問スケジュールのデータから自動で計算する仕組みづくりが進んでいます。

事務にかかっていた時間が減った分、スタッフは利用者と向き合う時間へ。「省力化のための省力化」ではなく、人の時間を取り戻すためのAI活用です。



生活介護の学びの現場(→特集2)では、支援中の気づきを逃さないために、首から下げられる小さなAIボイスレコーダー「PLAUD NotePin」を導入しました。「いま、〇〇さんが笑顔になりました」と声に出して実況しておく、AIがあとから記録を自動で整理。スタッフが記録業務に追われず、利用者との関わりに集中できるようになりました。タブレットでのタップ入力やAI文字起こしと組み合わせ、「最高の観察者・記録者・喜びの発見者」であるための道具立てが揃いつつあります。



ACTIVITY PLAN 2026-2027

あいの実&仙台あばいんプロジェクト／ほのびあ 活動計画



令和7年度にまいた種を、令和8年度は育て、実らせる一年に。
理事会・評議員会で承認された事業計画から、主な取り組みをご紹介します。

令和8年度の6つの柱

- 既存事業の安定運営と経営基盤の強化**
一つひとつの事業所の運営を丁寧に。人員配置の最適化と、サービスの質を評価につなげる加算取得を進めます。
- 医療型短期入所の拡充 — 「泊まれるストロベリー」へ**
承認された病床10床を使った宿泊型ショートステイが始まりました。段階的に受け入れ枠を広げ、看護職など専門スタッフの採用を強化します。ご家族が安心して「一晩あすけられる」選択肢を、確かなものにしていきます。
- オレンジアカデミー — 学びを事業に**
介護職員初任者研修を年3回開催予定。外国人材の育成で培ったノウハウを活かし、研修事業としての確立を目指します。
- 訪問看護ステーションの開設**
令和8年度中の事業開始を目標に、指定申請と看護職員の採用を計画的に進めます。訪問介護で培った在宅支援の力に「看護」が加わり、医療的ケアが必要な方の在宅生活をさらに厚く支えます。
- ほのびあ — 恒久的な仕組みへ**
仙台市との協働事業2年目。10月10日にはシンポジウム「家族未来会議」を開催し(→特集3)、事業期間終了後も地域に残る恒久的なピアサポートの仕組みづくりに取り組みます。あわせて、文部科学省の「移行期の学び」に関するプロジェクトも進行中です。
- 働く環境と、デジタルの土台**
処遇改善と働きやすい職場環境の整備を進めるとともに、AI・業務システムの導入によるデジタル化を推進します(→P15-16 デジタル特集)。

「AIの手触り、ICTの温もり」を道具に、人が人に寄り添うハイタッチな福祉へ。令和8年度のあいの実に、どうぞご期待ください。



ありがとうございました！ — ご支援への感謝 Thank You for All Your Donations!

令和7年度、あいの実には3,580,580円のご寄附をお寄せいただきました。医療的ケア児者とそのご家族への支援、療育キャンプやカフェ、視線入力アート——皆さまのお気持ちは、制度だけでは届かない「生きがい」の活動を支える力になっています。心より御礼申し上げます。

個人サポーターの皆さまへ



マンスリーサポーターの皆さま、単発のご寄附・ご寄贈をくださった皆さま、ありがとうございました。掲載をご許可くださった皆さまのお名前を、感謝の気持ちを込めて記載いたします。

宮城県	仙台市	佐藤 由紀枝、櫛引 志帆子、保科 千里、和山 江里子、大泉 御幸、松本 美香、 残間 智、石道 敦、鹿野 千絵、平田 政嗣、一迫 慎也、佐々木 佳代、千葉 康平、 千葉 恭平、工藤 あかり、片倉 明日香、盛野 真樹子、小澤 将平	埼玉県	東松山市	石田 義明	越谷市	福原 良之
	利府町	三上 寿孝、太田 百合子	東京都	調布市	鈴木 祥子		
	塩竈市	上島 香弥乃	神奈川県	横浜市	鈴木 厚子	太和市	田中 和教
岩手県	盛岡市	菅原 明奈	新潟県	上越市	齊京 真		
	二戸市	菅 よし子	富山県	魚津市	野島 比呂司		
			大阪府	堺市	林 杰陸		

●このほか、匿名でご支援くださった28名の皆さま、誠にありがとうございました。

(地域別・敬称略)

ご協力いただいた企業・団体の皆さまへ



活動をともに支えてくださった企業・団体の皆さまに、深く感謝申し上げます。掲載をご許可くださった皆さまのお名前を記載いたします。

宮城県	仙台市	株式会社GEAR、株式会社わたなべ、株式会社セーテン、 (有)都市建築設計集団／UAPP、特定非営利活動法人まちづくりスポット仙台、 高の原接骨院、	東京都	中央区	株式会社バードシード
	大崎市	特定非営利活動法人Lea	山形県	山形市	株式会社市村工務店
			福島県	福島市	株式会社クワラ・LAB

(地域別・敬称略)

助成をいただいた皆さま



- 厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」(9,932,000円 → 特集2)
- 公益財団法人太陽生命厚生財団(450,000円・視線入力カテキスタイル事業 → P14)

クラウドファンディング御礼 — カフェ3年目の挑戦



皆様ありがとうございました!

医療的ケア児の母親が働くCAFE de CHILL MILLの継続を支えるクラウドファンディングに、たくさんのご支援をいただきました。2026年6月に始まった挑戦は、7月に第一目標の60万円を達成。その後ネットゴール「想いをつなぐパティオ」に挑戦し、最終的に支援総額84万円・支援者89人に達しました。

READY FOR
84万円 達成!



これからも、一緒にあいの実の挑戦は、皆さまのご支援とともにあります。
月500円から参加できるマンスリーサポーターも受け付けています。

寄付は
こちらから



詳しく知りたい方は
あいの実
ホームページ



決算ダイジェスト

FINANCIAL HIGHLIGHTS

令和7年度のお金のはなし

あいの実の令和7年度決算をご報告します。事業活動収入は約4.4億円。その9割以上が、障害福祉サービスによるものです。お預かりした資金は、その7割以上を「人」に充てています。

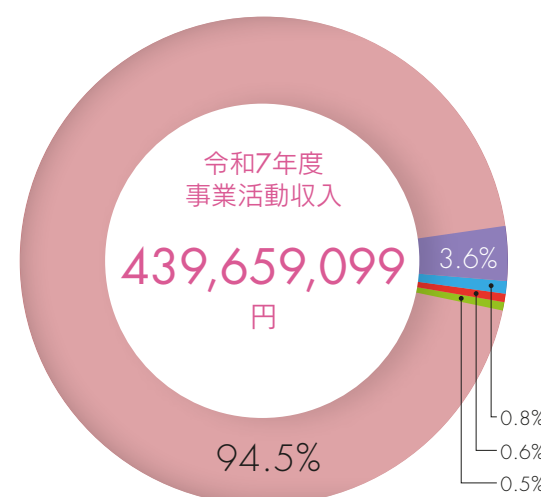
財務ハイライト

318,896,994円 ▶ 人件費支出(収入の約7割を「人」へ)

+13,577,245円 ▶ 当期活動増減差額

160,101,220円 ▶ 純資産/次期繰越活動増減差額 112,861,994円

●令和7年度決算は、令和8年6月13日開催の理事会・定時評議員会で承認されています。詳細な計算書類は現況報告書とともに公開されます。



障害福祉サービス等事業収益	415,522,393円	介護保険事業収益	15,812,416円	経常経費寄附金収益	3,580,580円
収益事業収益(カフェ)	2,495,937円	医療事業収益(クリニック)	2,247,773円		

